

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2025年 4月の終わりごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！園庭の木々、花のなんて生き生きとしていることでしょう。こまばっこたちも、元気、元気！

さて今年度初めての「絵本ブックトーク：けやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ」をお届けします。私、理事長の須藤麻江と、「本の部屋」担当の近藤千春先生とで、さまざまな絵本を紹介していきます。小さい人たちも私たち大人も、いっしょに絵本の世界、物語の世界を楽しみましょう。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。



* * * 【本のへや】から「こんにちは♪」（自己紹介）* * *

こんにちは。駒場幼稚園【本のへや】担当の近藤千春です。

新入園児の保護者のみなさま、はじめまして。在園児の保護者のみなさまは、こちらの「絵本紹介」でおつきあいくださっていることに感謝です。【本のへや☆移動図書館】でのお手伝いも、いつも本当にありがとうございます。

わたしは元幼稚園教諭で、今は児童文化(子どもの発達と遊び・絵本とおはなし)のフリーランス講師と、子育て支援の保育相談スタッフをしています。

今あらためて自分の子育てをふりかえてみると、絵本や児童書・遊び・自然体験を通して子どものなかに入り続ける旅のようなものだったなあ、としみじみ思います。子ども時代をめいっぱい楽しんでほしいとの一心で「絵本と遊び」を大事にしてきたことが実は、親子関係を豊かにしてもらったり、わたし自身が育てられていたことにも気づきました。なんてありがたいことでしょう。時は過

ぎ、今は長男夫婦に生まれた孫(4歳)の成長に目を細めるばあばとして、絵本と出会い直していることに幸せを感じています。

この配信を通じて、少しでも、「子育ての旬」を過ごしていらっしゃる保護者のみなさまのお役にたてたらいいなあと願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



● 『むしむしとことこ どこいくの?』

林よしえ 作 アリス館 2015年/1100円

「むしむしとことこ りんごのうえ と、おもったら りんごむし! にかっ」。こんな調子で、すいかえる、まるたぶた、いわわに……と、つぎつぎ登場するヘンテコさんたちの上にどんどん乗っかっていっちゃって、最後にのるのは、さてなんでしょう。リズムカルな言葉遊びとおかしな絵で、楽しませてくれる絵本です。(須藤)

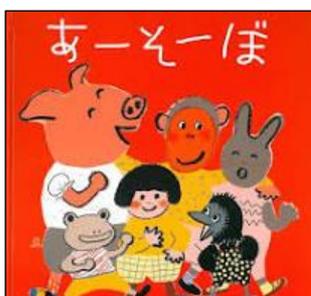


● 『だんごむしのだんちゃん うまれたよ!』

たけがみたえ 作 (童心社) 2023年/1430円

こどもたちはだんごむしが大好きですね。あのまんまるな姿はかわいいし、小さな手のひらにはちょうどいいサイズ感です。この絵本はだんごむしのだんちゃんがあかちゃんの時から始まります。だんちゃんは脱皮をくりかえして大きくなります。なにを食べるのかな、足の数は何本かな。だんちゃんが見つからないように気をつけている生き物はなんだろう。だんちゃんの成長を追いながら、だんごむしのことを知ることができて、そして多分、もっと好きになってしまいそう。私が感動したのは、だんちゃんのお腹の膜が、たくさんのたまごでふくらんで、丸くなることができなくなると、てきにみつからないようにじっと隠

れてたまごを守る姿。(26-27 ページ) だんごむしも一生懸命生きているんですね。(須藤)



● 『あーそーぼ』

やぎゆう まちこ 作 (福音館書店)2016 年/1100 円

ひとりの女の子が、友だちのぶたこちゃんの家へ遊びにいきます。「♪あーそーぼ」。ぶたこちゃんとはんを食べたら、今度はぶたこちゃんと一緒にきっきーくんのおうちへ「あーそーぼ」。次から次へと友だちを訪ねてお昼寝もして、最後はみんなでおにごっこ。大満足のみんなは一緒に「また あした あーそーぼ」。裏表紙は夜の布団にくるまって眠る女の子。今日も1日楽しく遊べてほんとはよかったですね。

「あんたがたどこさ」や「かごめかごめ」のようなわらべうたと同様に、「あーそーぼ」と呼びかける唄(うた)も、れっきとした「わらべうた」なのです。この絵本の文章自体もわらべうたが元になっているので、自然に唄うように読めてしまうのがとてもおもしろい。語りかけるような唄には人間関係をやわらかくする潤滑油のような素敵な側面もあって、わらべうたの遊び文化はやはり恐るべしですね。

ほら、今日も園内のどこかで「♪いーれーて」と子どもたちが「唄って」いますよ。「あーそーぼ」も、新しく仲間入りさせてもらえないかしらと小さな野望がムクムク(笑)。(近藤)



● 『なかよしのくまさん』

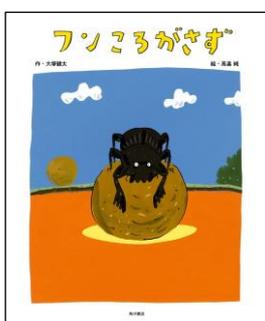
ロバート・ブライト 作 小林いづみ 訳 (富山房) ※重版未定 1994 年

小さなマーくんは、おはなしを読んでもらうことが大好き。今日も「こどもとしゃかん」で借りた本を持って、大好きなおじいちゃんに読んでもらおうと出かけますが、おじいちゃんは留守。みつばちの巣箱のところで、なかよしのくまさん

んに会いました。おやおや、くまさんってよく見るとおじいちゃんにそっくり。このくまは「とっても いい くま」だったので、男の子の望み通り、おじいちゃんみたいになってくれました(くまだから本は読めないけどね)。やがて、おじいちゃんが帰ってきて…。

幼い人たちには、納得の楽しい展開だと思うなあ。大人も、この本にさりげなく流れる“愛”を感じることができることでしょうか。マーくんの大好きなもの・くまさんの大好きなもの・おじいちゃんのお大好きなもの。それぞれの“大好き”がたいせつにされて、ふんわり優しくつながって…読みあう人たちを、あたたかな読後感で満たしてくれることでしょうか。親切なくまさんも、なんでもしってるおじいちゃんも、成熟した大人。お手本にしたいです。(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『Funokorogasazu』

大塚健太 作 高畠純 絵 (KADOKAWA) (重版未定) 2020年

えっ、Funokorogashiが、Funokorogasazu? タイトルに惹かれて読んでみたら意外に深いお話でした。Funokorogashiが、Fun、Fun、Funって鼻歌歌いながらFunをころがしている、みんなが「へんなやつ」と言うのです。Funokorogashiは、「Funokorogashi」という名前がいけないんだと思い、Funを引きずっては「ぼくはFunひきずりだ」、もちあげて運んでは「Funもちあげだ」とか試してみたものの、なんか違うなあ。そして「そうだ。Funをころがさないんだから、Funokorogasazuだ」と決めてみました。でも、なんかつまらない。元気がないFunokorogashiに、キツツキがシャープな一言を言います。その言葉でFunokorogashiは、大切なことに気がつくのです。とても大切なことに。(須藤)



● 『Okageshi』

村山桂子 作 織茂恭子 絵 (福音館書店) 1989年/1320円

たぬきの家の隣に、きつねが引っ越してきました。きつねの奥さんが、たぬきの奥さんにイチゴを持って挨拶に行きました。喜んだたぬきの奥さんは、「おかえしをしなくっちゃ」と、たけのこをきつねの奥さんに届けます。さあ、「おかえし合戦」の始まりです。お花やつぼや椅子やクッションなど、おかえしするものがだんだんエスカレートしてきて、とうとうこどもや家まで「おかえし」にしてしまう始末。でも大丈夫。表紙の絵を見てください。たぬきさんもきつねさんも、こどもたちもイチゴを食べて楽しそうでしょう。仲良しのお隣さんになりますね。(須藤)



● 『ちびくろ・さんぼ』

ヘレン・バンナーマン 文 フランク・ドビアス 絵 光吉夏弥 訳 (瑞雲舎)

2005年/1100円

黒人の少年サンボが、自分を食べようとするトラたちとのハラハラドキドキをうまく切り抜け、最後は最高のハッピーエンドをむかえる物語。このタイトルを見聞きしただけで、「懐かしい〜」「子どもの頃、好きだった」と思う大人はたくさんいることでしょう。かくいうわたしも、特に、トラたちがケンカの拳げ句にバターになってしまいうくだりが一番好きでした。そのバターの効いたホットケーキの味を想像しては、サンボのようにたくさん食べたい!!と憧れていたっけ(インドでは、バターをギーと呼ぶそうな)。

初めて日本で出版されたのが1953年(岩波書店)。子どもたちの心をつかんだこの本は、一時期絶版となります。人種差別問題や人権意識の広がる世界の流れに、日本の出版社も準じたのです。…時を経て、2005年に復刊しました。個人的にはとてもよかったと思っています。絶版になった理由は理解できる一方で、この本はやはり、“子どもにとってのすぐれたおはなし”だと思ふからです。(近藤)



※原作の絵の味をより生かした新訳絵本(径書房)も同じくオススメです♪



● 『わゴムはどのくらいのびるかしら?』

マイク・サーラー ぶん ジェリー・ジョイナー え きしだ えりこ やく
(ほるぷ出版)2000年/1430円

「あるひ、ぼうやは、わゴムがどのくらいのびるか、ためしてみることにしました。」ぼうやはわゴムの端を自分のベッドの枠にひっかけると、もう片方のゴムの端を持ちます。さあ、そのまま出発です。自転車に乗ってくたびれるまで走って、バスに乗って、汽車に乗って、飛行機に乗って、船に乗って。そうです。わゴムの端をにぎったまま、さらには砂漠でラクダにも乗っちゃうのです。…ここで驚くのはまだ早い。ついには…ち、地球を…!?

ああ楽しい～♪ここまで、空想?ホラ話?のスケールが大きいと、もう笑っちゃうしかありません。結末がどうなるのか、ぜひ親子で笑いながらおもしろがってくださいね。ラストページ(ぼうやの部屋の様子)まで、作者のセンスと遊びゴコロが光っていて、目が離せません。(近藤)

●大人のみなさんに。



『みんなであなたをまっていた』

シリアン・シールズ・作 アンナ・カリー・絵 松井るり子・訳 (ほるぷ出版)
1650円/2011年

うさぎの家に、赤ちゃんが生まれます。お兄ちゃん、お姉ちゃんも嬉しくて待ちどおしくてたまりません。赤ちゃんが生まれると、みんなで赤ちゃんを囲んで何度も名前を呼びました。お祝いに、ばあばやしいじやおじちゃんやおばちゃんがきてくれました。お客様は帰っても、「あなたはここにいてくれる いいこ いい

こ だいじなこ」。なんて優しく愛に満ちている物語なんでしょう。私の息子たちはもうおじさんですが、初めて我が子を抱いた時の嬉しく震えるような気持ちは今も忘れられません。改めて思います。生まれてきてくれてありがとう。(須藤)



● 『しあわせなふくろう』

ホイテマ ぶん チェレスチーノ・ピヤッチ え おおつか ゆうぞう やく
(福音館書店) 1430 年/2018 円

古くて崩れかかった石かべの中に、フクロウの夫婦がとても幸せに暮らしていました。にわとりたちにかちょうたち、くじゃくにあひるたちは、毎日毎日食べることと飲むことばかり。食べ終わったら飛びかかってケンカするのもいつものこと。ある日、鳥たちは、フクロウ夫婦の話を聴きに行きました。フクロウたちはなぜ、いつも静かに仲良く暮らしているのか知りたくなったのです。話を聴き終えた鳥たちは、「なんてまあ、ばかばかしい!」「そんなことでしあわせになれるはずがあるもんか」と、あきれて帰っていきます。

易しい言葉でありながら、奥行きのある洗練された文章。白の余白を生かしつつ無駄をそぎ落とした絵は、力強く美しい。どちらも、この本をつらぬく“ゆらがない芯”のように感じます。わたし自身は若い時にはつかみきれなかった「しあわせ」の意味を、年を重ねたからこそ自分なりにわかるようになりました。一度読んだらきっと忘れがたい、読む人に深く問いかけてくる大人の絵本ではないでしょうか。オランダの昔話。(近藤)



● 『ヒキガエルがいく』

パク・ジョンチェ 作 申 明浩/広松由紀子 訳 (岩波書店)2019 年/1980 円

なんという迫力！なんという圧！初めてこの本に出会った時の衝撃を思い出しました。

1匹のヒキガエルが、「ある場所」を目指して進みます。1匹が2匹、4匹、8匹…どんどん増えて、数えきれないほどの群れとなったヒキガエルたちは、野を越え山越え、人間社会のあぶない道路もなんのその(きっと大勢が車の犠牲になっているのでしょうか)。やがて、「ある場所」にたどり着きます。時は春。そうです。生き物たちが命がけで繁殖し、その命をつないでいく季節です。シンプルにまっすぐ響いてくる太鼓の音と、静かにグイグイと迫りくる絵が見事に溶け合い、圧倒されます。ことばのない2ページの、なんという深さと広がり。狂おしいほどに匂い立ってくる「命」の物語を、ぜひご堪能ください。あとがきにある作者の詩や訳者の短い解説までたっぷり興味深い、韓国の傑作絵本です。(近藤)



※『ごとおべえがいく～ひきがえるのはる～西村繁男 さく(かがくのとも 3)福音館書店』も素晴らしいので、読み比べも楽しいです。

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

- ① たんぽぽ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんに
- ・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。
 - ・ここでご紹介した絵本は藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で購入し、「藤井文庫」として本の部屋に所蔵しています。背表紙の藤色の丸シールが目印です。移動図書館で、お子さんが借りていくかもしれません。今年度も引き続き、ブックトークと移動図書館をどうぞお楽しみに。